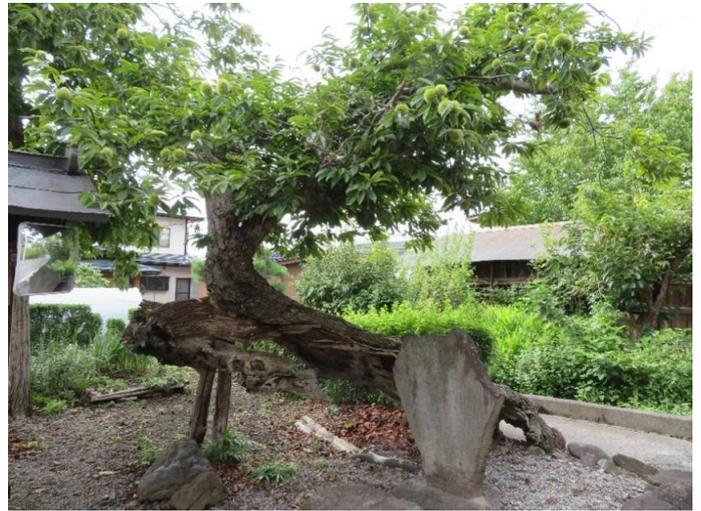


下図のような樹木の姿に目が止まった、何か同情の念が湧いた。



隣接知人宅内の半老木の梅
体の大半はボロボロ、しかし、子孫をつなぐ

図-1



中桜田地内知人宅内の半老木の栗
体の大半はボロボロ、しかし、頭は青々

図-2



「悠創の丘」芯が腐れて皮が残った
芯は無くなっても外形は頑として残存

図-3



「悠創の丘」皮が腐れて芯が残っている
芯は細っても頑として凜立

図-4

樹木の樹について

明治天皇が、1890(明治 23)年 10 月 30 日に渙発された「教育勅語」は、日本の道徳教育の根本理念を示す勅語である。その冒頭部の一説を取り上げる。

『朕惟^{おも}フニ 我ガ皇祖皇宗 国ヲ肇^{はじ}ムルコト宏遠ニ 徳ヲ樹^たツルコト深厚ナリ。・・・』

「徳ヲ樹ツル」は、徳を人民に植え付けるとの意味だが、「徳を立てる」ではなく、樹木の樹を使ったのである。天皇が人民に徳を立ててやるという上から目線ではなく、国民自らが自らに徳を植えて育てるように研鑽して欲しいという願いを込めたものだと思う。

別の姿形のものを取り上げる。

悠創の丘



図－ 5

高清水通り



図－ 6

日光街道



図－ 7

図－ 1 ～図－ 4 に出会いしばらく眺めたが、私の生き写しというか、生死の悲喜こもごもというか、私と重なるところを感じた。妙に特別の親しみを覚えた。どっちに転んでもそのように有りたいものである。自然界の成せる技に驚くばかりである。

まさに、自然が生み育てた盆栽という感じである。

(end)